



43

バスバーは25年度30億円規模に

―昨年6月の社長就任からこれまでを振り返って

「収益が厳しく、HDD（ハードディスク駆動装置）用サスペンション事業の撤退を決めるなど、ドタバタの1年だった。既存の自動車分野は、一部自動車メーカーの生産停止の影響があり、数量としては微増だったが、材料や労務費の価格転嫁が収益に寄与した。また、電子情報通信分野で、データセンター向け光コネクタの需要が伸び、第3四半期になって売りが上



サンコー

奈良 正社長

「インディアナ州の工場で生産するリングギアやAT（自動変速機）車用のフレックスペレートは電動化で需要が急速に減るとみていた。バスバーの生産は、こうした空きスペースを利用する計画だったが、電動化の遅れにより（計画に）影響が出そうだ。ただ、EV向け商材をやると

る期間になる」

―来期の見通しは

「エンジン車向けの既存事業は2027年までは成長が続くと見込むが、EV市場の鈍化もある中で、自動車全体でどれだけ伸びるかは予測が難しい。電動車向けのバスバーは、25年度にEVで新たに採用が決まったこともあり、

いものの、25年度には30億円規模になるとみている」

―日本勢の苦戦が続く中国市場での対応は

「日系メーカー向けの数量減少を受け、4〜5年前から現地の合弁会社を通じ、地場メーカーへの供給を進めている。信頼性が求められる弁はね用の線材や、高精度なリン

グギアなど、付加価値のある製品への評価が高い。中国でも品質を重視する傾向が強まっており、受注につながり

「北米でもバスバーの量産が26年に始まる。見通しは

「関税に関しては、材料の調達課題だ。弁はねに使用する特殊鋼は、世界でも数社しか供給できず、これまでもメキシコや日本から米国に輸出してきた。バスバーも同様で、米国内に適当な材料がない。価格転嫁をどうするかは悩ましい問題だ」

「インディアナ州の工場で生産するリングギアやAT（自動変速機）車用のフレックスペレートは電動化で需要が急速に減るとみていた。バスバーの生産は、こうした空きスペースを利用する計画だったが、電動化の遅れにより（計画に）影響が出そうだ。ただ、EV向け商材をやると

「2倍超の長尺かつ、絶縁性や耐熱性など安全面での高い要求に 대응することができ

る。また、長尺のバスバーを採用する自動車メーカーでは、組み付け時に寸法差が必ず発生する。このズレを吸収するのがフレキシブルバスバーだ。20枚もの薄板を積層し、両端のみを溶着することで柔軟性が出る。バスバーはハイブリッド車（HV）向けも含め、約10年の実績がある。今まで蓄積したノウハウを生かし、技術提案型で採用拡大を狙っていく」

技術提案型でEV部品のシェア獲得へ

成長が期待できる。自動車メーカー側の量産の遅れにより、当初掲げていた売上げ目標（40億円）には届かない

「北米でもバスバーの量産が26年に始まる。見通しは

「関税に関しては、材料の調達課題だ。弁はねに使用する特殊鋼は、世界でも数社しか供給できず、これまでもメキシコや日本から米国に輸出してきた。バスバーも同様で、米国内に適当な材料がない。価格転嫁をどうするかは悩ましい問題だ」

「インディアナ州の工場で生産するリングギアやAT（自動変速機）車用のフレックスペレートは電動化で需要が急速に減るとみていた。バスバーの生産は、こうした空きスペースを利用する計画だったが、電動化の遅れにより（計画に）影響が出そうだ。ただ、EV向け商材をやると

「2倍超の長尺かつ、絶縁性や耐熱性など安全面での高い要求に 対応することができ

る。また、長尺のバスバーを採用する自動車メーカーでは、組み付け時に寸法差が必ず発生する。このズレを吸収するのがフレキシブルバスバーだ。20枚もの薄板を積層し、両端のみを溶着することで柔軟性が出る。バスバーはハイブリッド車（HV）向けも含め、約10年の実績がある。今まで蓄積したノウハウを生かし、技術提案型で採用拡大を狙っていく」

「記者の目」金属の塑性加工をコア技術として、エンジンやトランスミッション向けの部品を供給してきた。奈良社長は自社の強みを「付加価値で勝負」と表現する。次世代の柱として期待するバスバーは電動化を追い風に需要を着実につかんできた。EV関連では、200アンペアの大電流を高精度で測定できる電流センサーも持ち、充電器のほか、商用ハイブリッドトラックで採用実績がある。ただ、工程の最後に組み付けるハーネスと異なり、バスバーは新車開発の初期から食い込まなければ受注に結び付かない。事業拡大に向けて、顧客の技術課題に 대응する「提案」の機会を増やせるかがシェア拡大のカギになる。

（草木 智子）